

## 史料紹介と研究

慶應義塾  
図書館蔵 橋本経亮旧蔵「山城国上野庄差図(案)」・  
「山城国上野庄坪付図」について

土山 祐之

## はじめに

先般、慶應義塾大学三田メディアセンターから『橋本経亮旧蔵 香果遺珍目録』が刊行された<sup>1)</sup>。橋本経亮とは京都梅宮神社の祠官かつ和学者として一八世紀末から一九世紀初頭にかけて活躍した人物で、彼が蒐集した約千点にも及ぶコレクションを「香果遺珍」と総称する。「香果遺珍」は件数の豊富さに加え内容も多岐にわたることから長らく未整理であったが、二〇〇九年度より目録作成作業が開始され、本目録はその作業の成果報告となっている。

さて、本目録には新出・未紹介史料である三枚の差図が「山城国上野庄差図(三枚)」(雑九四九)として収められている。橋本経亮や彼の蒐集活動、ならびに「香果遺珍」については一戸渉氏の詳細な検討があるためそちらを参照いただくことにして<sup>2)</sup>、本稿では「山城国上野庄差図(三枚)」について紹介ならびに検討を加えていきたい。この三枚の差図はそれぞれ「山城国上野庄差図(案)」・「山城国上野庄坪付図」・「山城国桂川用水差図」と名付けられるものであるが(以下、それぞれ本差図・本坪付図・用水差図と表記する)、紙幅の関係上、本稿では本差図・本坪付図を紹介・検討したい。なお、用水差図については次号以降にて扱う予定である。

## 一 「山城国上野庄差図(案)」について

## 1 文書の体裁

本差図(図1)は一紙からなっており、法量は三一・八×四九・三cmである。表面右上には経亮没後に「香果遺珍」を引き継いだ丹後国久美浜の豪商

稲葉家の所蔵印である「蒼龍館置」が捺されている。端裏書や裏書などはなく、差図の作成年代を直接示す記述はない。文書全体に渡って虫損などもなく、横二つ折り、縦四つ折りにされた跡が残る。料紙の質は経亮が東寺百合文書を写す際に用いたものとは異なっており、不純物などがやや混ざる中世の楮紙系統のものに似ている<sup>3)</sup>。文書全体にわたって描かれている坪界は、ほぼ均等大きさで区切られ、線のぶれも少ない。墨壺などの道具を用いて引いたものと思われる。

本差図は本坪付図・用水差図と共に袋(二八・三×一三・八cm)に収められた状態で伝わっている(図2)。袋には「東寺所伝／梅津／上野／旧図三」「香果蔵」、朱筆で「雑四号」と記されている。「東寺所伝」の筆跡は経亮自筆のもので、「雑四号」は後筆である<sup>4)</sup>。「香果遺珍」は稲葉家で整理・分類されているため、「雑四号」という記載はその際記されたものと思われる。袋にも「蒼龍館置」が捺され、それ以外に複数の丸印もある。本袋の紙背が借用状であることから、丸印はそれと関係している可能性が高い。

## 2 文書の内容

まずは本差図の中の地名・注記の翻刻を示したい(図1右上より適宜番号を振った)。

1	榎原里	11	御所跡
2	足長里	12	釣殿并池跡馬場
3	建保以後川	13	尾花里
4	建長以後當時川	14	同
5	郡里	15	同有作
6	押領	16	同
7	有荒野	17	建保以前往古河
8	押領作	18	同
9	同	19	梅津上野旧境
10	同	20	同

- 21 同  
22 押領  
23 河  
24 同  
25 同河  
26 梅津下庄名堤村、又号郡

本差図には文書全体にわたって坪付が描かれ、各一坪に「榎原里」「郡里」「足長里」「尾花里」と記されており、上野荘（上桂荘）の荘域にあたる桂川右岸の榎原里・郡里・足長里（一部）・尾花里（一部）の範囲を対象にしたものである。現在の地図上におおまかに反映させれば、**図3**のようになる。**図3**ならびに後掲する**図5**については、QGISを用いて作成した。作成にあたっては、本差図の条里界線が金田章裕氏の示した条里プラン（金田後掲註一四・一六論文）に重なるように位置情報を与え、差図を加工している。坪付内には複数の河道が描かれ（**図3**①②④）、それらの時期変遷についての注記や「押領」の記述もある。このことから、本差図作成の主眼目は桂川の河道変化とそれに伴う押領を図示することにあつたと考えられる。

さて、本差図からは建保年間（一二二一～一二二九）と建長年間（一二四九～一二五九）に桂川の河道が大きく変わったことが読み取れる。建保年間以前は「建保以前往古河」とあるように河道④が桂川の主流路で、上野荘と梅津荘との境界であつた。ところが、建保年間に河道は④から①へと変化し、さらに建長年間には②へと移っていったことが本差図の記述から判明する。それでは③の線はどのように理解すればよいだろうか。一見すると③を河道と捉えることもできそうであるが、①②④の線にはそれぞれ河道であることが明記されていることを踏まえると、その記述のない③を積極的に河道とは位置づけがたい。

そこで注目したいのが押領の範囲である。「押領」と押領を示すと考えられる「同」の記述がある坪（これらの坪をまとめて「押領坪」とする）はいずれも③よりも東側に、河道④の西側に位置している。そもそも、上野荘の東限は「桂河東堤樹東」であり、桂川に沿って築かれていた左岸側の堤までが荘域であつた。<sup>53</sup> そのため、上野荘としては④から①へと河道が移ることは荘域が狭くなることを意味することになり、当然都合の良いことではない。一方で、陸続きの土地が広がった梅津荘は「押領坪」へと耕地を拡大する。梅津荘の耕地拡

大（押領）は③の西側には及んでいないため、③が限界域であつたのだろう。

では、なぜ梅津荘による押領の限界域が③のラインであつたのだろうか。上野荘では康永四年（一三四五）に検注が実施され、検注取帳が残されている。この検注取帳には「河原田」「河原島」の所在地が記載されている。この検注取帳から上野荘における河原田の所在地を比定した伊藤俊一氏によれば、河原田は郡里一・二・三・一〇・一一・一二・一四・一五・二二・二三坪、尾花里三・九・一〇・一一坪に展開しており、この範囲はまさしく③と河道④の間の坪にあたる。そうした「河原田」に限定して梅津荘が進出したということは、梅津荘は本来耕地であつた土地を押領したのではなく、河道④が移動したことで出現した河道跡地および河原を耕地化したことを示している。このことから、③の線は④が河道であつたときの河原の範囲を示したものと考えられる。このような梅津荘の行為は、上野荘にとっては河道移動前の荘域内に進出されていることになるため、それを「押領」と称して非難したのである。本差図は梅津荘が河道跡地および河原を開発し耕地化していることを上野荘が「押領」として問題視し、それを図示するために上野荘側が作成したものと位置づけられる。

梅津荘による上野荘への押領行為は、上野荘の「四段百冊歩」が梅津荘に「うちとられ」ている記述のある寛喜元年（一二二九）の検注目録や、「梅津庄押領地六町余」という記述がある寛元三年（一二四五）の検注目録などによつてすでに知られているが、<sup>54</sup> 本差図から梅津荘の押領行為の背景には河道変遷があつたことが指摘できる。

梅津荘による押領は正和四年（一二一五）にも問題となつた。このとき上野荘の預所であつた道我は梅津荘による押領行為を後宇多院に訴え、院宣が下された。それが次の史料である。<sup>55</sup>

山城国上野庄田地行覚法師濫妨事、奏聞候之處、可進梅津庄文書之由、度々雖被仰、于今不進之上、且就寛喜・寛元文書、且任去年 院宣、停其妨、可被全所務者、依御気色執達如件、

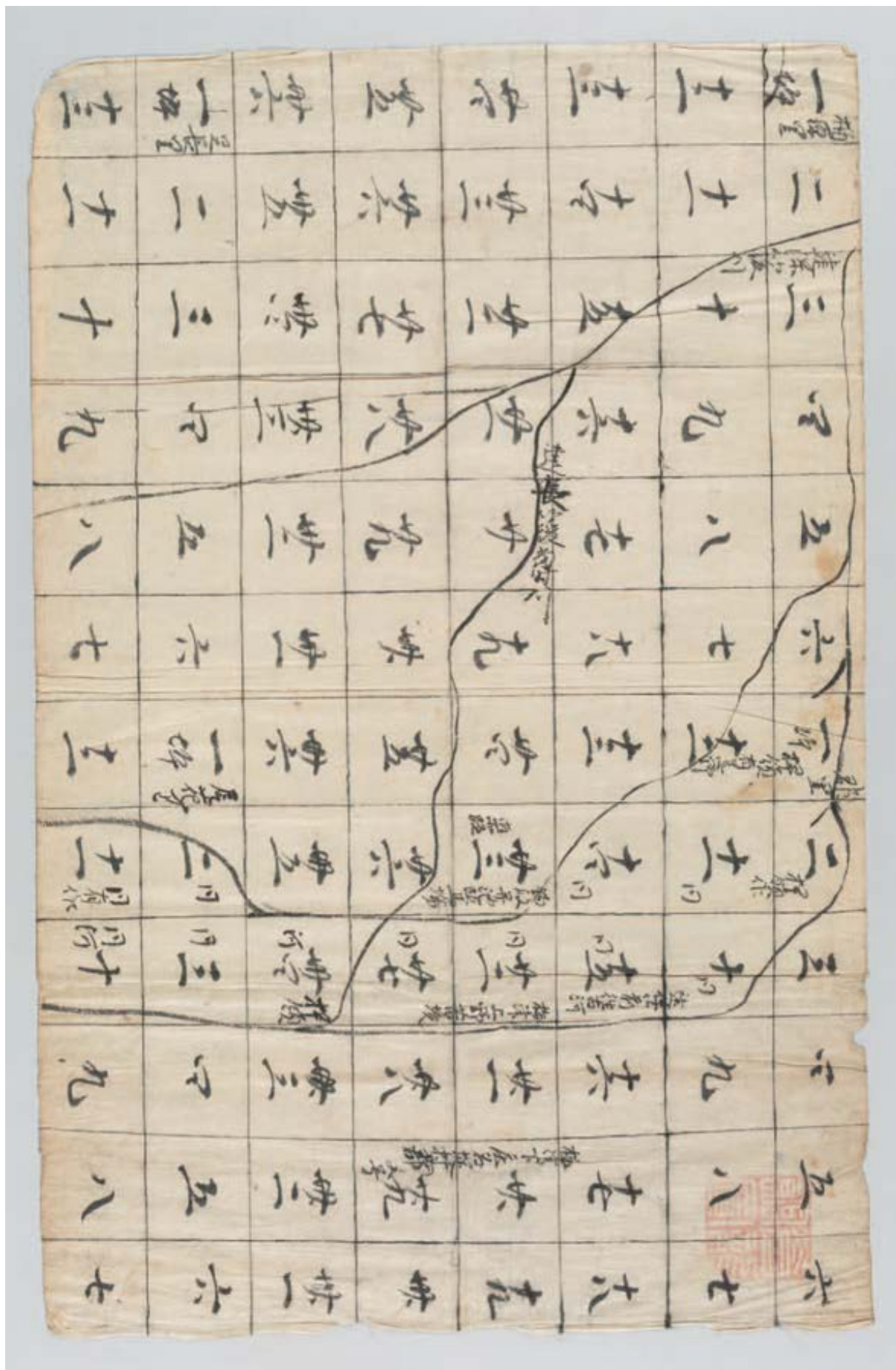


图1 山城國上野莊差圖(案) 慶應義塾圖書館所藏·提供





図3 「山城国上野庄差図(案)」現地比定図 国土地理院標準地図をもとに作成、差図には地理情報を与えて加工した。



図2 「山城国上野庄差図」収納袋  
(上：表 下：裏)  
慶應義塾図書館所蔵・提供



図4 山城国上野庄指図 (「東寺百合文書」又函三五二)  
東寺百合文書WEBより引用

〔正和四〕<sup>〔異字〕</sup>

十一月廿四日

宣房

謹上 大納言法印御房

本文書では梅津荘による濫妨の停止が命じられているが、その判断基準の一つに寛喜・寛元の検注帳が用いられている。この院宣を最後に梅津荘による上野荘への押領行為は史料上に見えなくなり、道我は相論が一段落したためか、自らが所持していた文書を東寺の寺庫に納める。それが次に掲げる史料である。<sup>⑪</sup>

〔大納言法印送目六〕<sup>〔編集者〕</sup>

一、山城国拝師庄文書

一卷 院宣等

一卷 道願請文等

一結 代々検注張案

嘉禄  
建久 長承  
正応

一結 雜文書等

一、同国上野庄文書

二通 院宣

当庄与梅津庄相論事

二通 代々取張目六正文

寛喜  
寛元

一通 当庄指図

(中略)

右文書等、悉所納寺庫之状如件、

文保元年四月 日

道我がこのとき寺庫に納めた上野荘関係文書は、「当庄与梅津庄相論事」という記述や、寛喜・寛元の検注帳が同時に納められていることから、梅津荘との相論関係文書であったと考えられる。このとき「当庄指図」も納められており、『日本莊園絵図聚影 釈文編二 中世一』では「山城国上桂荘指図」(以下「上桂荘指図」とする)に比定する(図4)<sup>⑫</sup>。しかし、「上桂荘指

表1 正和五年実検取帳記載「河」所在地

里名	坪	面積
檜原里	18	200歩
檜原里	19	90歩
檜原里	20	90歩
檜原里	21	2反270歩
檜原里	27	2反30歩
檜原里	29	1反
檜原里	32	330歩
郡里	10	1反
郡里	15	1反120歩
郡里	23	5反184歩
郡里	24	2反270歩
郡里	26	1反180歩
足長里	7	1反33歩
大豆里	7	1反120歩

図」には梅津荘による押領行為の記載がなく、本差図には梅津荘による押領が図示されているということを踏まえれば、「当庄指図」とは「上桂荘指図」ではなく本差図のことを指していると考えるのが適当であろう。

ただし、本差図は正和の相論の際に作成されたものではないと思われる。上野荘では正和五年(一一三六)に検注が実施され、実検取帳には「河」が記載されている(表1)<sup>⑬</sup>。それによれば、本差図に河道が描かれている檜原里一〇・一五坪には「河」記載がなく、一方で本差図に河道が描かれていない檜原里二七坪には二反三〇歩、二九坪には一反の「河」が記載されている。このことから、正和五年段階の桂川は上野荘西側の荘域外を流れ、檜原里二七坪から東進し、同二一坪・同二九坪あたりを蛇行しながら上野荘内を横断する形で流れていたものと推測される。これは本差図に描かれている河道②とは異なった流路であることから、本差図を正和の相論の際に描かれたものとして考えることは難しい。おそらく建長年間から正和年間以前のいずれかの時期に作成されたものであったと考えられる。

また、本差図が「当庄指図」そのものの、つまりは正文であったかどうかについても慎重にならざるをえない。その理由の一つ目は、「当時川」として描かれた河道②の年号が訂正されているという点である。相論の最中に描かれた差図であれば、いつ河道が変更したかを示す情報は重要なものであり、「建長」を「建保」と書き間違えるというのは考えにくい。二つ目は「同」や「河」の記載である。「同」は河道④の右岸に沿う形で記載されており、



先述したように「押領」を意味していると考えられる。そのため、郡里三四坪のみに記されている「河」も本来は「同」であり、それを誤記したため同坪に「押領」と書き加えたという可能性もある。これらの理由から、本差図を正文と位置づけるためには更なる検討が必要であり、現状では中世のいずれかの段階で写した案文と位置づけておきたい。

### 3 桂川の河道変遷

本差図の最も特徴的な点は、桂川の河道変遷時期がわかるという点である。中世における桂川の河道変遷については、金田章裕氏・田村憲美氏・伊藤俊一氏による研究がある<sup>14</sup>。金田氏は桂川の河道のあり方がわかる複数の史料に加え、「上桂荘指図」を通説どおり正和五年のものとした上で、九世紀後半に上桂集落のすぐ東を南下していた河道が、正和五年以前には上桂集落と上野集落の間を東進し徳大寺集落の東側を南下する河道へと変化していたことを指摘した。さらに一四世紀末から一五世紀はじめにかけて、桂川の河道は現河道とほぼ同じ位置へと移ったことを明らかにしている。こうした金田氏の見解を踏襲し、さらに細かく桂川流路の変遷時期について検討を加えたのが田村憲美氏である。田村氏は上野荘関係史料として残されている検注帳類の検討から、一四世紀後半には桂川の河道は現河道付近に到達したという見解を導き出した。さらに両者の研究を踏まえ、伊藤氏は河道変遷と河原田の発生、上野荘における水害の様相とその復旧について論じている。

すでに金田氏が指摘しているように、桂川は頻繁に河道を変化させていたため、空中写真に見える旧河道も乱流した跡を示している。そうしたことから、金田氏は前述した河道変遷の理解を導き出しているが、本差図はその理解をさらに深めるものである。本差図河道④の注記に「建保以前往古河」とあるように、河道④は「往古」よりの河道であったと認識されていた。そのため、上桂集落の東を南下し下桂集落方面へと向かう九世紀の河道は、比較的早い段階で「往古河」と認識される河道④へと流路を移したものと考えられる。その後、桂川は建保年間を契機として大きく西に移動し、建長年間に

は上野荘内を横断する形へと河道を変化させていく。本差図は金田氏が指摘した桂川の度重なる河道変化の具体相を示したものと言えよう。

さて、桂川の河道変遷について、三者の見解には「上桂荘指図」が正和五年のものという前提があるが、本差図はその前提に再検討を促すものになる。図6は本差図の上に「上桂荘指図」に描かれている河道と正和五年実検取帳の「河」記載坪（網掛部）とを重ねたものである。正和五年実検取帳の「河」記載によれば、当時の河道は檜原里二七・二一・二九坪を経過した後、檜原里三〇坪・郡里二四・二三坪を東進し、その後郡里二六坪へと南進する。こうした流路は「上桂荘指図」に描かれている河道とは異なっている。特に顕著なのが郡里二三・二四坪である。両坪はそれぞれ河道面積が五反一八四歩・二反二七〇歩であり、桂川の主流路であったと考えられるが、「上桂荘指図」ではほとんど河道がかかっていない。このことは、「上桂荘指図」が正和五年のものではないことを示しているよう。郡里二四・二三・二六坪と続く河道は、本差図河道②の流路と似通っており、河道②の一部は正和五年段階でも桂川の流路であったと考えられる。

それでは、「上桂荘指図」はいっづつ作成されたもののだろうか。この点を明らかにすることは本稿の検討範囲を越えてしまうため詳述は避けるが、上野荘の検注帳類を見る限り康永年間（二三四二〜四五）あたりのものと思われる<sup>15</sup>。康永四年坪付注文には檜原里二六・二七・二九・三二坪、郡里二五・二六坪が河成として記載されており、これらの坪は「上桂荘指図」の河道記載坪に当たっている。なかでも、正和五年実検取帳で「河」記載のない郡里二五坪に二反一七〇歩の河成が記載され、同二六坪の河成も三反一二〇歩と正和五年実検取帳よりも河成面積が増加していることは注目すべき点である。両坪の河成面積は他坪に比較しても広く、主河道となっていた可能性が高い。加えて、暦応三年（一三四〇）以来上野荘と梅津荘とは「前河原以下田地」をめぐる相論となっており、「上桂荘指図」の「河原」記載との関連が想起される。こうした理由から「上桂荘指図」は康永年間に作成されたと思われる。その場合、一四世紀半ばまでは現状と異なる場所に河道があ

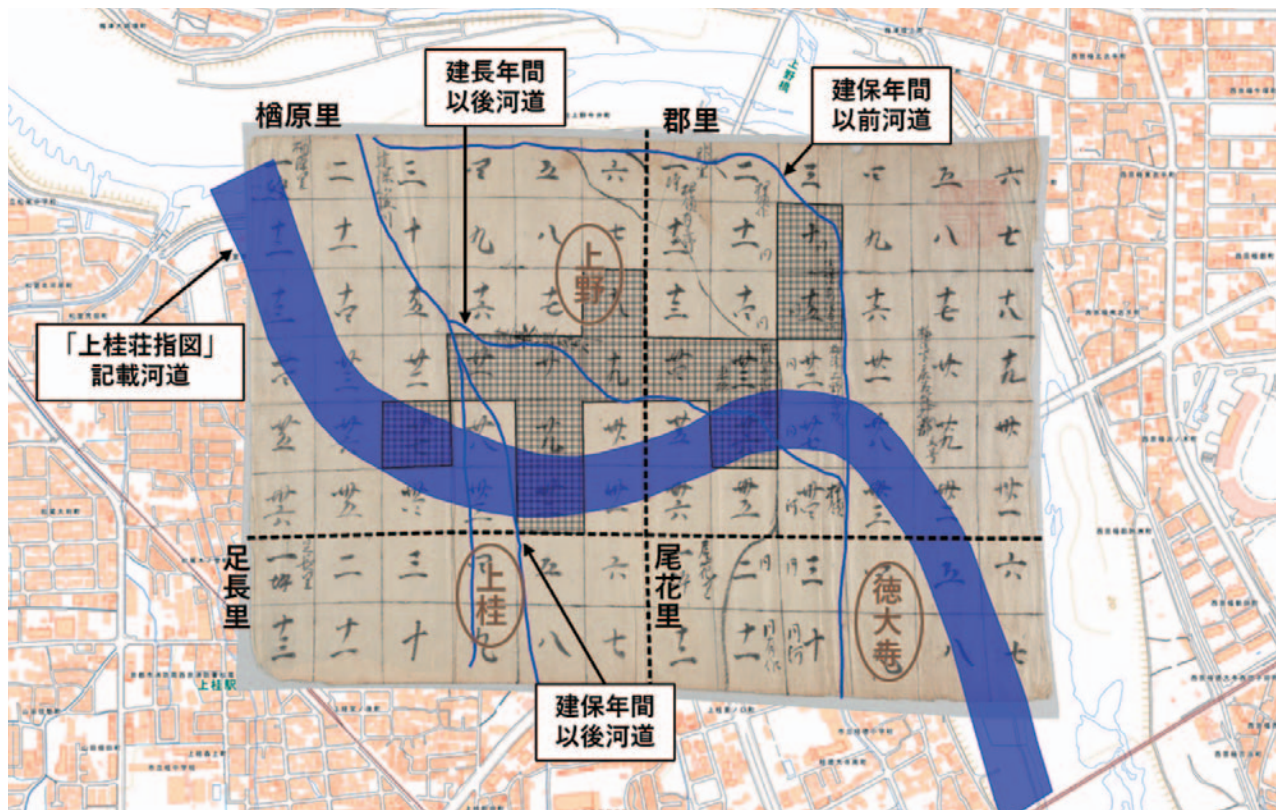


図5 桂川河道変遷試案図 国土地理院標準地図をもとに作成、差図には地理情報を与えて加工した。  
(網掛部は正和五年検注帳記載「河」所在地)

ったことになり、一四世紀後半あるいは一五世紀前半までのいずれかの時期に、現河道へと流路を変化させる大規模な洪水が発生したと考えられよう。いずれにせよ、本差図の登場によつて桂川の河道変遷については再検討する必要があるだろう。

二 「山城国上野莊坪付図」について

1  
文書の体裁

本坪付図(図7)は三紙からなっており、法量は短辺四二・三×長辺八二・二cmである。表面右上には朱印で「蒼龍館置」が捺されている。端裏書や裏書などはなく、差図の作成年代を直接示す記述はない。現状の折り目は縦に四つ折り、横に二つ折りし、それを三つ折りにした状態となっている。三紙ともに文書全体にわたって均等な幅での角筆が認められる。この角筆は坪付が記されていないところにも確認でき、一紙に六つの里が描けるようになっていている。料紙の質は中世の楮紙系統のものと似ており、紙継目には裏に補強紙が貼られている。里全体にわたって坪数が記されているのは楢原里・郡里・足長里・尾花里で、郡里の坪中には誤記した数字の上に正しい数字を重ね書きしている箇所もある。坪数以外の記述は朱書きであり、足長里七坪の「在家」のみが唯一墨で記されている。また、二紙目と三紙目にわたって記されている「大豆里」の「豆」は、紙継目下にも朱字で「豆」と記されており、現状の貼り継ぎとは異なった順序で貼り継がれていた可能性もある。

## 2 文書の内容

本坪付図の朱筆で囲まれている部分および「曾祿里」七坪、「村合里」六・八・二二・二三坪、「荒木里」一四坪、「大豆里」七・八坪が上野荘の荘域にあたる。朱筆で囲む表現やその範囲における朱筆の記述内容などは「上桂荘指図」と一致している。ただし、「上桂荘指図」とは筆跡は異なり、また本坪付図には「上桂荘指図」に描かれている河道や「河原」記述などもないため、「上桂荘指図」の写しではない。おそらくは、上野荘の範囲を記すため



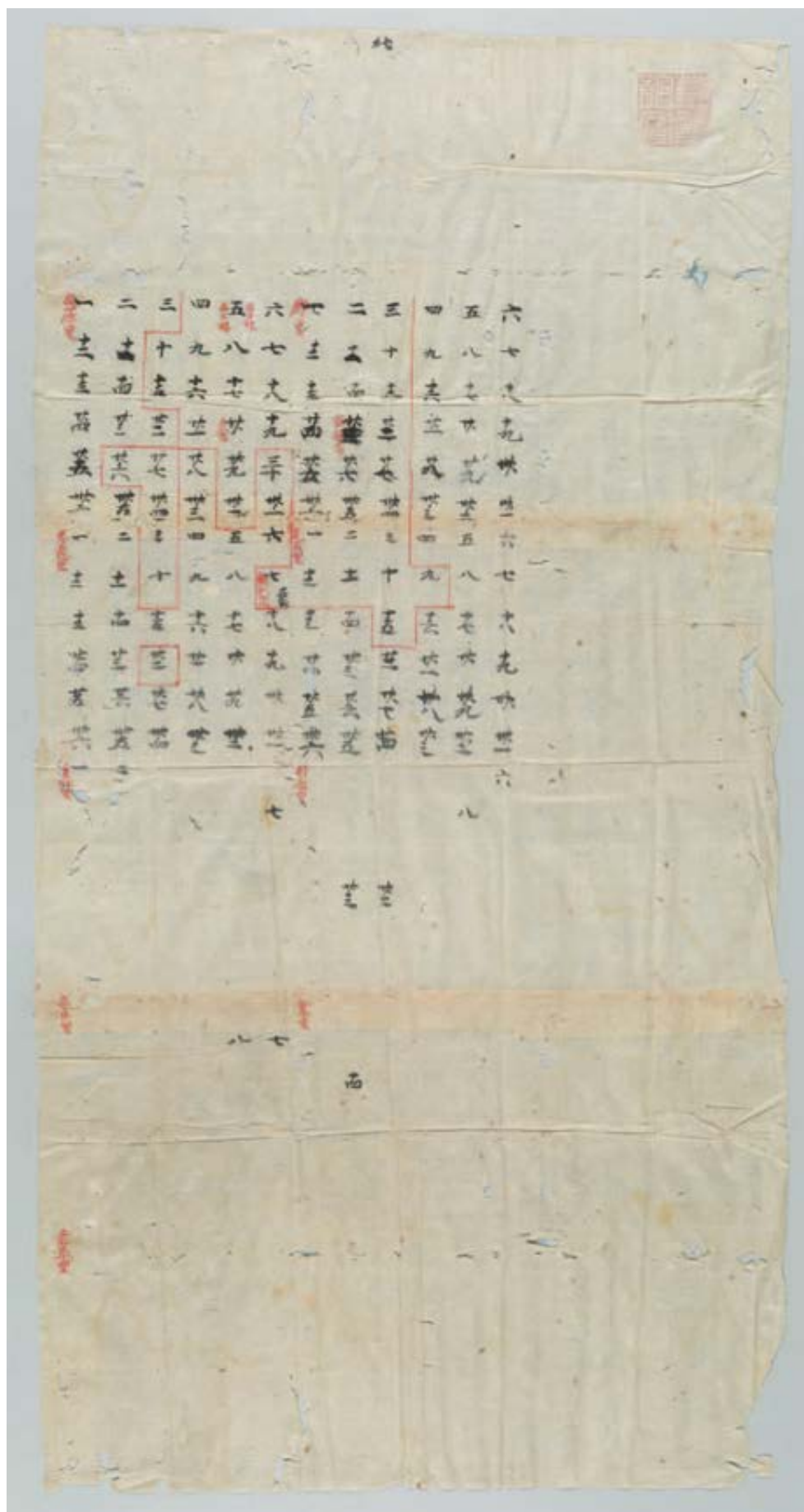


図6 山城国上野庄坪付図 慶應義塾図書館所蔵・提供



に「上桂莊指図」を参考に描かれたものと考えられる。

本坪付図の重要な点は、曾祢里・村合里・荒木里・大豆里・桑原里の所在地が記されていることである。上野莊の所在地は検注帳類に記載されている里名と「上桂莊指図」によって、榎原里・郡里・足長里・尾花里については判明していたが、曾祢里以下の所在地はこれまで明らかにされていなかった。その点、本坪付図によって上野莊地域の全体像が把握できる事の意義は大きい。ただし、本坪付図に記載されている曾祢里以下の所在地をそのまま現地比定すると、これまでの条里プラン研究で明らかにされてきた葛野郡・乙訓郡の里の現地比定と齟齬をきたす。例えば、本坪付図では尾花里の南に村合里、荒木里と続いているが、葛野郡・乙訓郡の条里プランを復原した金田氏は尾花里の南は荒木西里、その南はシマタカリに比定している<sup>16)</sup>。加えて、曾祢里や大豆里との関連が推測できる「曾祢西里」や「大豆田里」は、榎原里の北東に位置する条里に比定している。また、桑原里については青山宏夫氏がこれも榎原里の北東に位置する条里に比定するなど、本坪付図に記載されている里の所在地とは異なった見解が導き出されている<sup>17)</sup>。もちろん、一つの里が複数の名称を有していることもあるため、同じ里を別の名称で呼んでいる可能性もある。先行研究で導き出された結論と整合的に理解するためにも、今後も検討が必要となってくる。なお、本坪付図の作成年次については不明とせざるをえない。

#### おわりに

以上、多分に推測を重ねた記述ではあるが、桂川の河道変遷ならびに上野莊に属する里の所在地を示す二点の史料を紹介した。いずれの史料も今後の上野莊研究にとって重要なものとなつてこよう。

さて、稿を閉じるにあたり、最後にもう一点のみ指摘したい。第一節では道我が寺庫に納めた文書の中に「当庄指図」があり、それが今回紹介した本差図の正文にあたることを指摘した。道我は康永二年に死去するが、その後道我が寺庫に納めた文書の目録が再度作成されている<sup>18)</sup>。それによれば、文保

元年に「当庄指図」と同時に納められた院宣二通と寛喜・寛元取帳目録は康永二年の文書目録にも記載されているが、「当庄指図」は記載されていない。康永二年は「前河原」をめぐる梅津莊との相論が発生していたため、その参考として用いられていたのだろうか。それとも、すでに寺僧らは「当庄指図」の存在を認識していなかったのだろうか。本差図伝来の経緯を明らかにするためにも、さらなる検討を続けていく必要がある。

#### 注

- (1) 一戸渉監修『橋本経亮旧蔵 香果遺珍目録』(慶應義塾大学三田メディアセンター、二〇二一年三月)
- (2) 前掲注一「目録」「解題」、一戸渉『上田秋成の時代』(ペリカン社、二〇一二年) 第四章および資料編
- (3) 料紙の質については高橋敏子氏よりご教示いただいた。
- (4) この点については一戸渉氏にご教示いただいた。なお、本差図の閲覧や画像の提供などについて、一戸氏には大変お世話になった。ここに記して感謝申し上げます。
- (5) 玉手則光山城国上野莊寄進状案(『東寺百合文書』ヨ函八四一—一〇)
- (6) 伊藤俊一「山城国上野莊の水害と再開発」(『日本史研究』六七五、二〇一八年) なお、康永四年には検注取帳のほかに河原田のみを記した注文も残されている(『東寺百合文書』ア函五三・五四)。この河原田田数注文は名ごとに記されているが、そこに記載されている名のなかには検注取帳に記載されていないものもある。この両者の関係性については今後の検討課題としたい。
- (7) 「東寺百合文書」カ函一五
- (8) 「東寺文書」追加購入分四
- (9) 後宇多法皇院宣(『東寺百合文書』セ函南朝文書一)
- (10) ただし、暦応年間から貞和年間にかけて、今度は上野莊による梅津莊への押領行為を訴える相論が発生する。
- (11) 大納言法印道我所進文書目録(『東寺百合文書』メ函一〇五)
- (12) 東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影 釈文編二 中世二』(東京大学出版会、二〇一六年)
- (13) 上桂莊美検取帳(『東寺百合文書』チ函九)
- (14) 金田章裕「中世の村落」(藤岡謙二郎ほか編『講座考古地理学四 村落と開発』

- 学生社、一九八五年）、同「上桂庄差図と桂川」（東寺（教王護国寺）宝物館編『東寺とその庄園』東寺（教王護国寺）宝物館、一九九三年）、同『微地形と中世村落』（吉川弘文館、一九九三年）、田村憲美「日本中世史研究と高分解能古気候復元―その理論的準備と山城国上桂庄を事例とする一試行―」（『日本史研究』六四六、二〇一六年）、伊藤俊一前掲注六論文
- (15) 武田修氏は正和五年実検取帳で把握されている庄域と「上桂庄指図」に描かれている範囲が異なることから、「上桂庄指図」の作成年代を正和五年ではなく長徳三年（九九七）に比定している（武田修「長徳三年玉手則光寄進状と上桂庄差図について」『資料館紀要』二二、一九九四年）。ただしこの比定については、「上桂庄指図」は庄内を通過する河道を描くことを目的にしているため散在田坪は省略された、という伊藤俊一氏の批判もある（前掲注六論文）。
- (16) 金田章裕『条里と村落の歴史地理学研究』（大明堂、一九八五年）、同『古代景観史の探求』（吉川弘文館、二〇〇二年）。なお、『日本荘園絵図聚影 釈文編二 中世二』（前掲註二二）では「山城国川嶋南庄指図」に記されている「荒木里」を「荒木西里」と同一のものとして扱っている。
- (17) 青山宏夫「平安京西郊桂川の河道変化と耕地開発―葛野郡班田図から松尾社境内図まで―」（金田章裕編『平安京―京都 都市図と都市構造』京都大学学術出版会、二〇〇七年）
- (18) 山城国上野庄文書目録（「東寺百合文書」カ函三七）  
（学術専門職員／荘園絵図プロジェクト）

## お知らせ

東寺旧蔵（山城国上野庄差図）は慶應義塾図書館が主催する下記の展示会に出品されます。国学者橋本経亮（つねすけ）の旧蔵資料を核に、当該差図をはじめ複数の東寺旧蔵品、また模写や模造、図像資料、典籍など約八〇点が並びます。

## 第三三回慶應義塾図書館貴重書展示会

### あつ 鬼められた古―江戸の日本学― いにしえ

会期：二〇二一年一〇月六日（水）～一二日（火）

九時～二一時（最終日は一六時閉場） 入場無料

会場：丸善・丸の内本店四階ギャラリー

東京都千代田区丸の内一・六・四丸の内オアゾ内

TEL：〇三・五二八八・八八八

協賛：丸善雄松堂株式会社 協力：慶應義塾大学附属研究所斯道文庫

ギャラリートーク：慶應義塾大学附属研究所斯道文庫准教授 一戸渉

①一〇月八日（金）一八時～ ②一〇月一〇日（日）一四時～

各回二〇名までの事前申込制（先着順）・申込はウェブサイトにて。

[https://libguides.lib.keio.ac.jp/mit\\_annual\\_exhibition](https://libguides.lib.keio.ac.jp/mit_annual_exhibition)

第33回慶應義塾図書館貴重書展示会

あつ 鬼められた古  
いにしえ

江戸の日本学

いにしえの文物はついに人を魅了してきました  
江戸時代の日本ではそれらを集め  
正しく理解しようとする  
好古の文化・空間が大きく発展しました  
松平定信・本居宣長・上田秋成・藤井村  
橋本経亮・持谷椿堂などの担い手たちの  
知的営みを多数の切公開資料から探ります

2021年10月6日（水）～12日（火）  
9:00～21:00（最終日は18:00閉場） 入場無料  
丸善・丸の内本店4階ギャラリー  
東京都千代田区丸の内1-6-4丸の内オアゾ内 TEL:03-5288-8881

ギャラリートーク 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫准教授 一戸渉  
①10月8日（金）18時～ ②10月10日（日）14時～  
【会場限定で事前申込制（先着順）】申込みはウェブサイトよりお願いいたします。

協賛 慶應義塾大学 協力 丸善雄松堂